

日本ラカン協会第14回大会プログラム

日時 : 2014年12月7日(日) 10:00~18:30

場所 : 専修大学神田校舎7号館731教室(3F)

(〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8)

- 水道橋駅(JR)西口より徒歩7分
- 九段下駅(地下鉄/東西線、都営新宿線、半蔵門線)出口5より徒歩3分
- 神保町駅(地下鉄/都営三田線、都営新宿線、半蔵門線)出口A2より徒歩3分

大会参加費 : 無料

1. 研究発表 10:00~12:00 (発表時間30分、質疑応答15分)

10:00-10:45 中村 亨(中央大学)

訴えかける亡霊のまなざし ジーン・トゥーマーの『砂糖きび』と

シャーウッド・アンダーソンの『暗い笑い』の関係について

司会: 伊吹 克己 (専修大学)

概要: 批評家バーバラ・ジョンソンは、ラカンの精神分析に依拠し文学における相互テクスト性について理論的考察を行っている。彼女が究明するのは、決して自己充足することのないテクストのありよう、テクストを横断するさまざまな諸力や欲望である。本発表では彼女の考察を援用し、人種差別のタブーを扱った混血作家の創作『砂糖きび』と、それに衝撃を受けた白人作家の小説『暗い笑い』とのダイナミックな相互関係を検証する。

11:00-11:45 佐藤 朋子(東京大学)

シャンドル・フェレンツイ、あるいは陰性転移のメタ心理学

司会: 福田 大輔(青山学院大学)

概要: フェレンツイは技法上および理論上でさまざまな革新を試みた分析家として知られている。本発表では、彼が陰性転移の問題を掘り下げるにしたがい、師フロイトとは異なる反復の思考を発展させていったことを跡づけたい。とりわけ、日中残渣の回帰(覚醒時の(前)意識的印象が夢のなかに現われるという事態)をめぐる晩年の思索がもつ急進性を明確にし、その思索が「自我」とその身体的次元に関するフロイトの前提を揺るがす可能性へ向かっていることを示したい。

2. 昼休み 12:00~13:30

* この時間に理事会が開催されますので、理事の皆さんはご参集ください。

3. 総会 13:30~14:15

議長選出
会務報告... 論集刊行に関する報告など
決算(2013/2014年度)審議
予算(2014/2015年度)審議
次年度活動計画について

4. シンポジウム 14:30~18:30

精神分析における愛—転移の現在

提題者

若森 榮樹(獨協大学)

磯村 大(地精会金杉クリニック)

平野 信(こころの分析室/北小田原病院)

司会

立木 康介(京都大学)

なお、大会終了後、有志による懇親会を予定しております。
お時間に余裕のある方は、こちらの方にもぜひご参加ください。

日本ラカン協会
第 14 回大会シンポジウム
精神分析における愛—転移の現在

2014 年 12 月 7 日 (日) 14:30-18:30
専修大学神田校舎 7 号館 731

提題者

若森 榮樹 (獨協大学)
磯村 大 (地精会金杉クリニック)
平野 信 (こころの分析室 / 北小田原病院)

司会

立木 康介 (京都大学)

ヒステリーの治療において「転移」を発見したとき、フロイトは愛の秘密の解明に一步近づいたと感じた。愛とはひとつの症状、分析家と患者の関係のなかに移された症状である—この認識から、精神分析は出発する。

だが、いかなる症状にも正負の両面が見出されるように、転移は治療の原動力であると同時にその進展を阻む障碍でもある。フロイトの言葉でいえば、これはつまり、抑圧と抵抗と転移はすべて同じ素材でできている、ということだ。加えて、治療関係のなかで愛に姿を変えた症状が転移であると考えすることは、治療の終結という問いを複雑にせずにはおかない。というのも、転移が症状の代理として機能している以上、治療の終結は最初の症状の解消によってではなく、厳密に、転移の解決によってはじめてもたらされると言わねばならないからだ。精神分析の歴史が治療の終結をめぐる問いの歴史でもある理由は、まさにそこにある。

転移についてのラカンの理論的取り組み—プラトン『饗宴』の読解、「知っている」と想定される主体」の概念化、アガルマとして出会われる対象 a への着目、「無意識の閉じ」としての転移の性格づけ、など—は、すべてこのようなコンテクストを踏まえてなされたものである。今日、私たちはそれをいかに捉え、利用し、発展させてゆくことができるのだろうか？ また、転移にかかわるラカンの教えは、他の精神分析家の実践や、精神分析以外の領域の実践と、いかに響き合うのだろうか？ そして何よりも、私たちの愛と転移にはいかなる運命、いかなる未来が待ち受けているのだろうか。

「資本主義のディスクールは愛にかかわる物事を棚上げする」とラカンが述べたのは 1972 年だった。資本と結託したテクノロジーによって大量生産される対象が、主体の欲望を満足させるともなく過剰に飽和する際限のないプロセスのなかで、「愛」が生きながらえる余地は今日ますます稀少になりつつあるように見える。フロイトが「リビドー」と名づけた無意識の性愛に拠って立つ精神分析は、もちろん、それに甘んじることはできない。

転移について語り合う本シンポジウムは、愛がここから反撃に打って出るための、ひとつの布石にほかならない。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

(立木康介)

ラカンのセミネール第8巻「転移」について(仮)

若森 榮樹(獨協大学)

1960-1961年に行われた「転移」のセミネールから翌年の「同一化」(1961-62) それに続く「不安」(1962-63)のセミネールまで、ラカンは分析の具体的な進行を緻密に跡付けてきた。本来それらは「父の名」で締めくくられるはずであったが、それが周知の事情により中断され、結局「精神分析の4基本概念」(1964)という形で総括されたことはよく知られている。

「転移」のセミネールはプラトンの対話篇『饗宴』の読解で始まるが、それは『饗宴』が「精神分析の一連のセッションの報告」と読めるからであり、またセミネールの後半でクローデルの戯曲「シーニュ・ド・クーフオンテーヌ」三部作が取り上げられたのは、分析の最終局面で何が起こるのかを示すためであった。このように「転移」のセミネールは、「逆転移」など、転移の過程で現れる諸問題をどう扱うべきか、「欲望とその解釈」で述べられた「欲望の弁証法」が転移の過程でどのように現れるのか、そして「不安から欲望へ」と進む精神分析の道筋において、欲動およびその対象としての対象 a (objet petit a) と分析家はどうか関わること、といった実践的な問いを提起し、見事に答えている。

私の発表では、このセミネールの読解を通して「転移」をラカンはどのように捉えていたかを見、そこから出発して日本という「構造」、あるいは日本人に精神分析は何をもたらさうかを述べたいと思っている。

*

臨床のために必ず必要となる分析的なもの 『転移』と臨床家の育ち方

磯村 大(地精会金杉クリニック)

Freudは自身の症例集『ヒステリー研究』に本体と十数年隔たる盟友 Breuer 執筆のアンナ・O症例を併録した。Lacanがセミネール11巻12章でその記念切手を話題にしたようにアンナ・Oこそソーシャルワーカーのドイツにおける un des grands noms である Bertha Pappenheim その人である。

分析家という身分確立以前に医師たちが当時、往診含めて、介護で身も心も糞した彼女たちを担当することは今日というスーパービジョンないし「教育分析」的作用を及ぼした、ということができないだろうか。職制確立途上という今日では想像するほかない事態はどのようなものであったのだろうか。

寄り添い Therapeia の起源に遡りつつ、社会改革運動と車の両輪である介護・ソーシャルワーカー・医療の実践家の誕生について提題者自身の1984~1993年自主管理病棟と言われた東大精神科赤レンガ病棟での体験とともに考察する。

*

転移、逆転移、そして分析家の欲望

平野 信（こころの分析室 / 北小田原病院）

フロイトの精神分析の探求、それはプロイアーとのヒステリーの共同研究によって始まった。しかし、プロイアーは女性患者の向けてくる情動に狼狽し、ヒステリーの治療と研究の場から立ち去ることになった。後になって、フロイトはその女性に転移性恋愛が起こっていたことを回想している。治療技法の練り直しの中で、分析家の呈する逆転移も考慮されるようになっていった。ところが、ラカン派精神分析では、逆転移の視点から考察することは稀である。何故か？単なる理論的相違のみならず、その背景には精神分析体験の深化という問題があるだろう。英国の分析家マーガレット・リトルそして私の分析体験を素材にしながら、考えていきたい。